

明治の女流文学者の一人に、樋口一葉がいます。一葉は、賤子にあこがれ、賤子のような文学者になりたいと勉強していました。生前の賤子に会うことなく、賤子の死を聞いた一葉は、

訪はばやとおもひしことは空しくて

けふのなげきにあはんとやみし

という短歌を寄せていますが、その一葉は、賤子の死後半年、十一月二十三日
に、賤子と同じ病気で二十五歳の生涯を終えました。

私の生涯は神の恵みを

最後まで心にとどめた

ということより外に

語るなものもない

若松 賤子